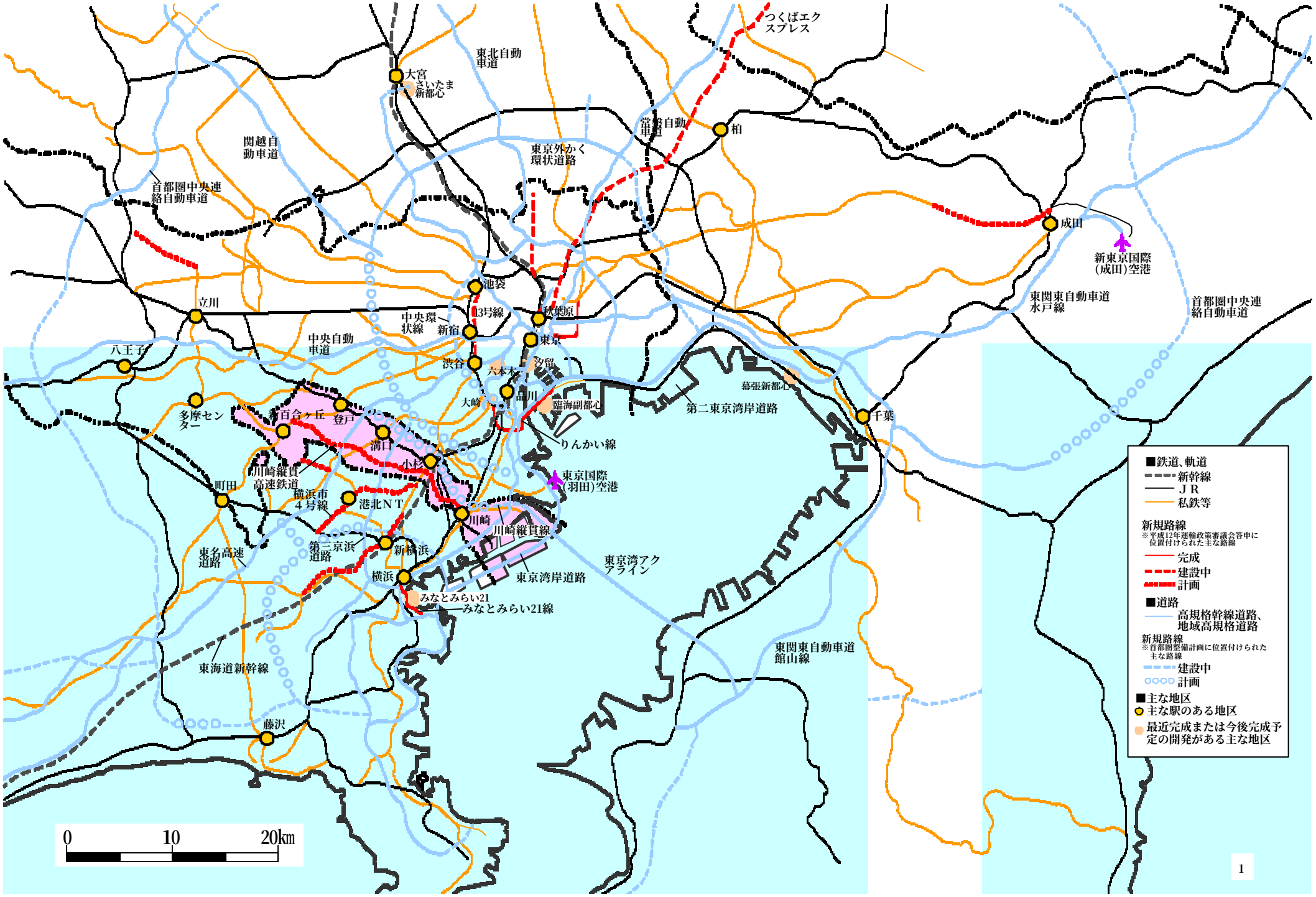
1．首都圏における川崎市の位置

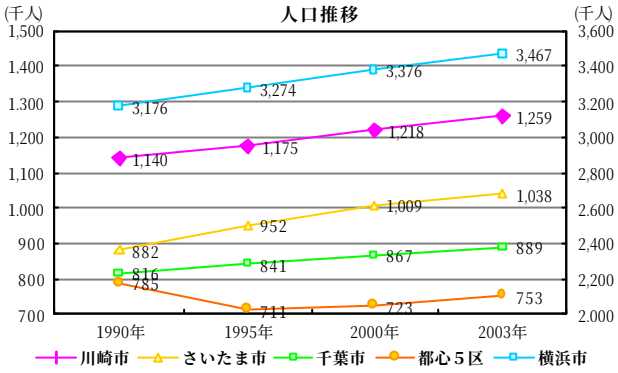


２．人口特性と動向

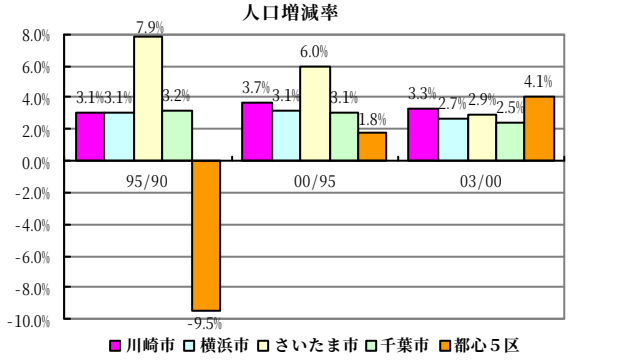
（１）総人口

●首都圏の主要都市の人口は増加傾向にあるものの、近年においては東京都心部への人口回帰が顕著となっている
●そうした中で、川崎市の人口増加率は、他都市よりも高い

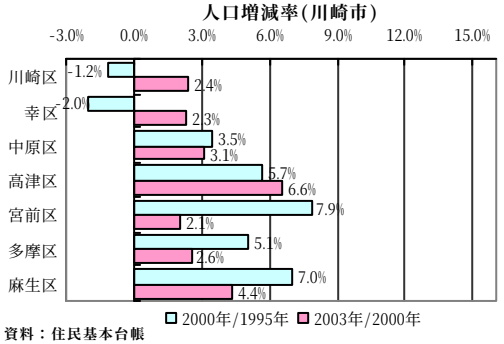
都心５区…千代田区、中央区、港区、新宿区、渋谷区



資料：住民基本台帳



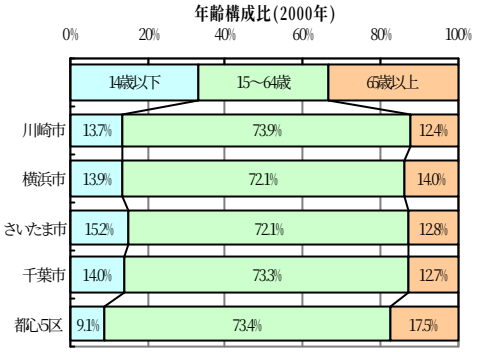
・さいたま市の1990年・1995年は合併前の浦和市・大宮市・与野市の合計値
資料：住民基本台帳

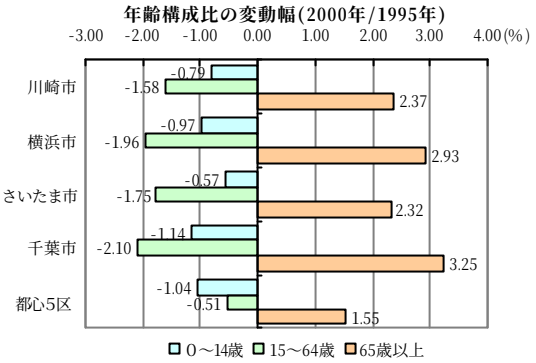


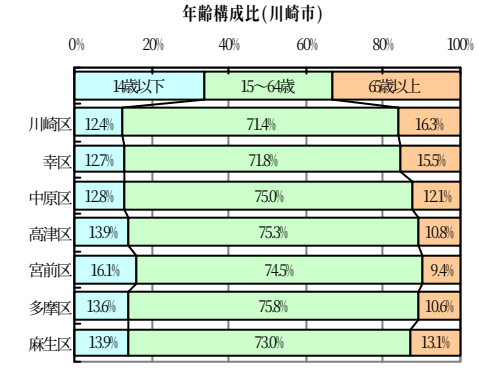
資料：住民基本台帳

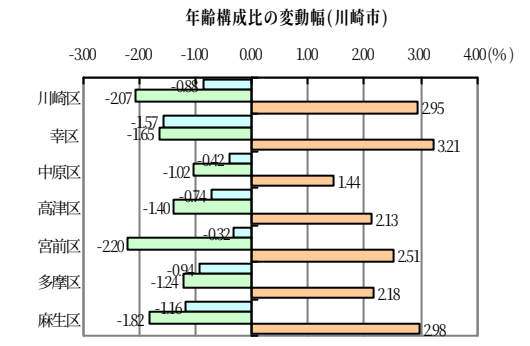
（２）年齢構成

●川崎市は主要都市と比べて少子高齢化がやや遅れているが、今後、同様に少子高齢化のペースが速まることが予想される





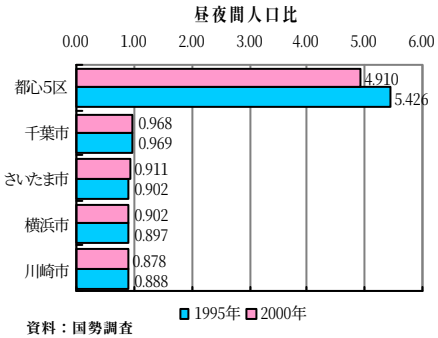




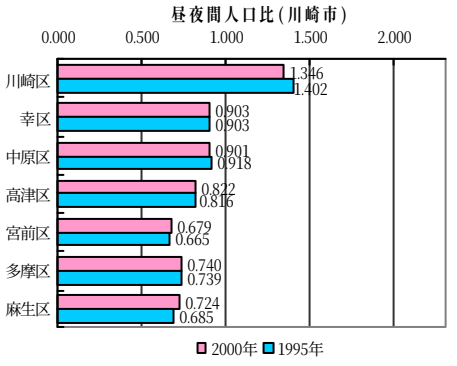
資料：国勢調査

（３）昼夜間人口比

●東京都心５区以外は大きな格差はないが、川崎市が最も低く１９９５年よりも若干下がっており、住宅市街地としての性格も有している



資料：国勢調査



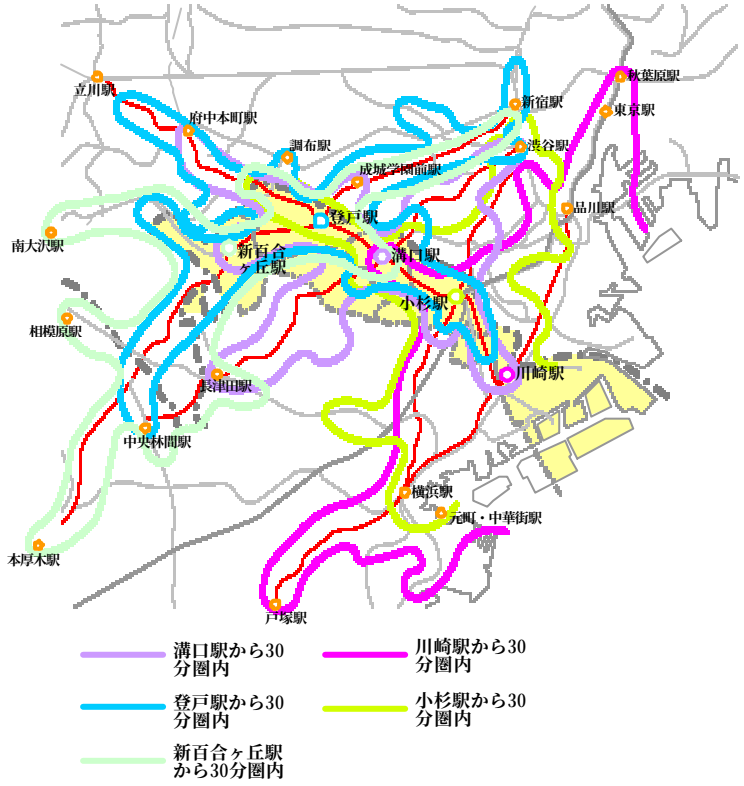
3．生活圏の現状と変化

(1)鉄道利用

1)川崎市内主要駅からの30分圏内

●市内主要駅の30分圏内には、各沿線の市外主要駅が入る

川崎市内主要駅からの30分圏内イメージ



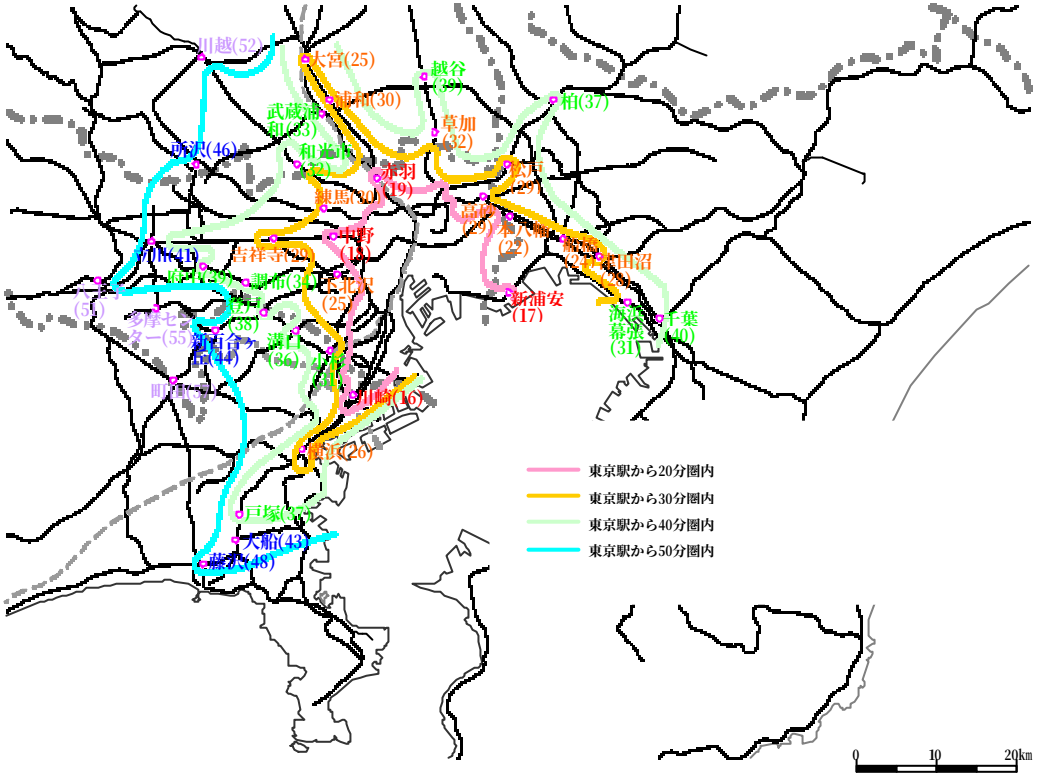
※平日昼間における駅間の所要時間(待ち時間や乗換え時間などを含み最短の乗車時間とは異なる)の同一時間帯をイメージ的に結んだもので、線上が全て当該所要時間という訳ではない

使用ソフト：「駅すぱあと」(ヴァル研究所)

2)東京駅からの所要時間

●川崎駅周辺の南部地域は、東京駅とのアクセス性に優れている

東京駅からの駅間所要時間イメージ



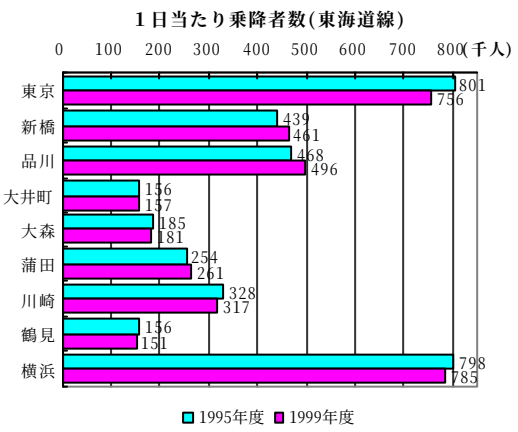
※( )内数値は所要時間

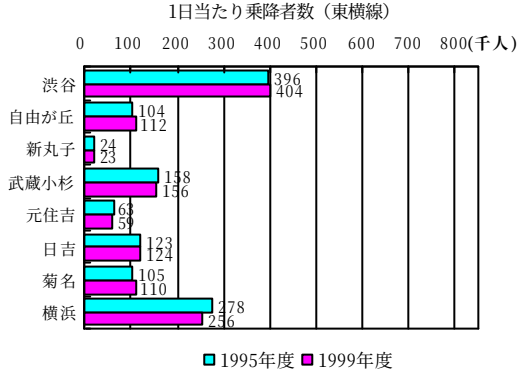
※平日昼間における駅間の所要時間(待ち時間や乗換え時間などを含み最短の乗車時間とは異なる)の同一時間帯をイメージ的に結んだもので、線上が全て当該所要時間という訳ではない

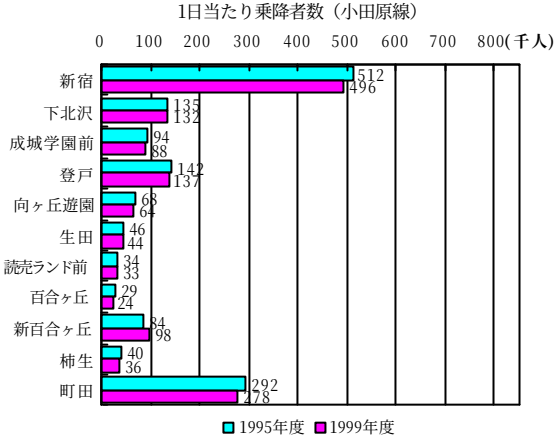
使用ソフト：「駅すぱあと」(ヴァル研究所)

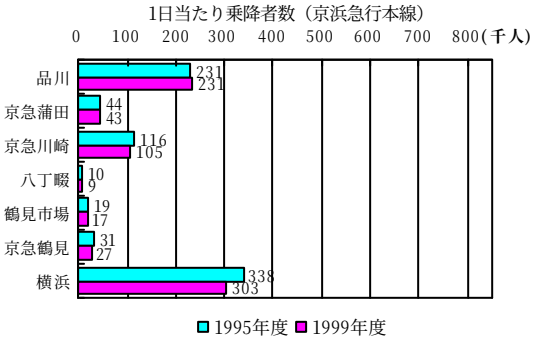
3)鉄道利用客数

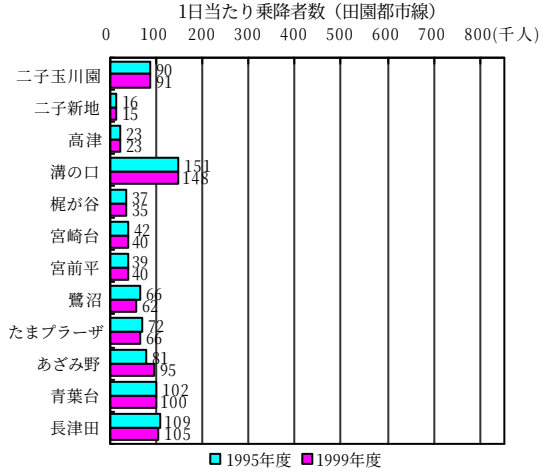
- ●ＪＲ川崎駅の乗降客数約３０万人は川崎市で最大となっている。また、蒲田・鶴見など市外の近隣する駅よりも多い
- ●私鉄各路線の南武線との結節点である東横線武蔵小杉・田園都市線溝の口・小田急線登戸や、小田急小田原線と多摩線の分岐点である小田急新百合ヶ丘の各駅では、乗降客数が１０～１５万人程度の乗降客数がおり、各路線の周辺駅よりも拠点性が高い

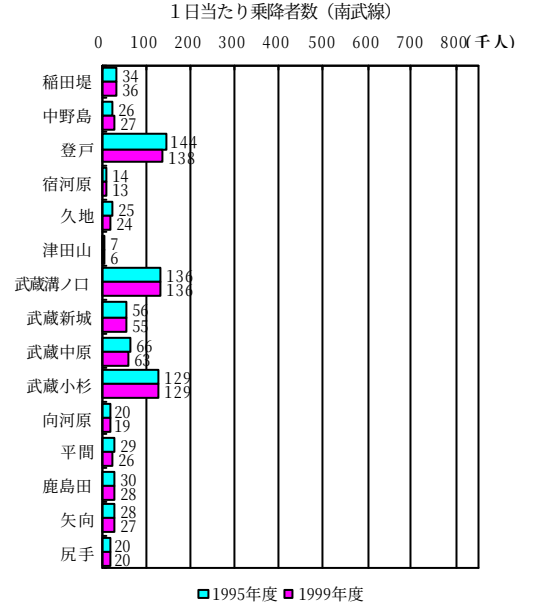












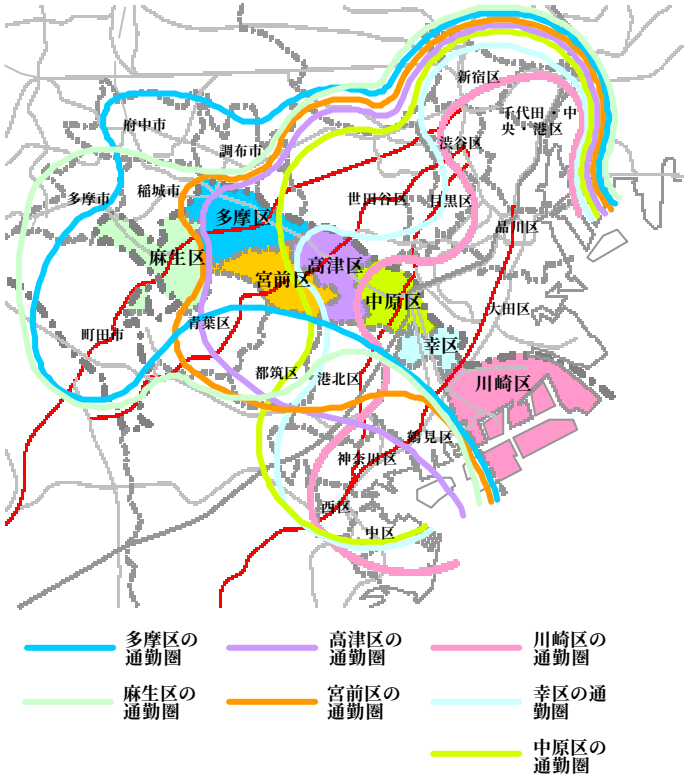
資料：東京大都市圏・京阪神圏駅別乗降者数総覧2002(発行：エース総合研究所)

(２)生活圏の広がり

１)通勤圏の広がり

●千代田区など東京都心３区は全ての区の通勤圏となっている。
●川崎区は、私事では主な行動圏となっていない宮前・多摩・麻生区も含めて、全ての区の通勤圏となっている
●各区とも通勤圏が重なるとともに、各路線の鉄道沿線を中心に通勤圏が広がる

通勤圏の広がりイメージ

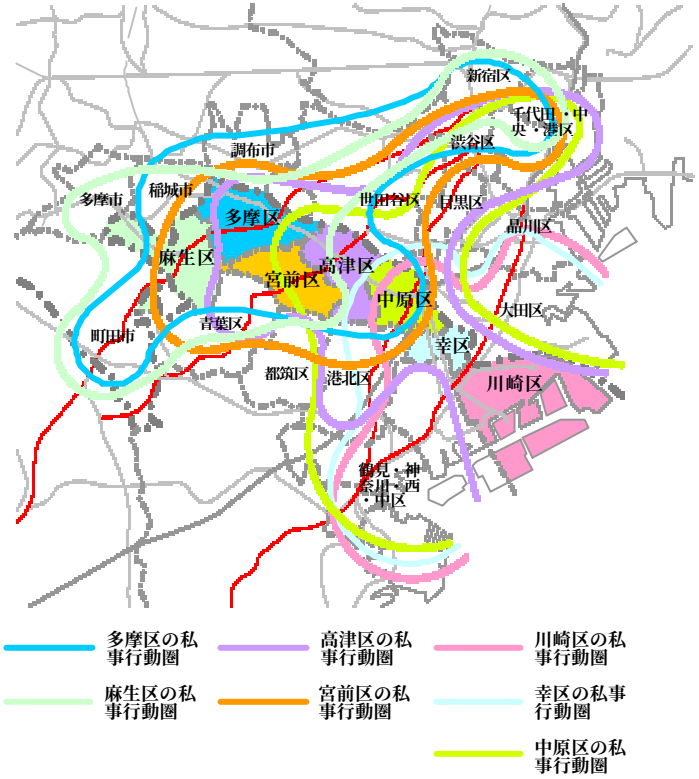


各区の通勤の行き先１%圏域を結んだ通勤圏のイメージ
資料：国勢調査(2000年)

２)私事行動圏の広がり

●買物・娯楽など私事目的の行動圏域は、東海道線・東急線・小田急線の各路線の方向を中心に広がるとともに、南武線方向では、隣接する区程度までの広がりとなっている
●通勤と同様に、各区の行動圏域は重なっている
●日常的な買物などは自区内や市内外の隣接している区が多いが、娯楽などでは東京都心部まで広がっている。また、東急線・小田急線の各沿線の区では東京都心部との関係が強い

私事行動圏の広がりイメージ



各区の買物など私事の行き先１%圏域を結んだ私事行動圏のイメージ
資料：パーソントリップ調査(1998年)

3)通勤の変化

(パーソントリップ調査)

- ●東京区部への通勤、市内通勤がそれぞれ４割程度となっている
- ●東京区部へが約２万４千トリップ増加し最大の増加数となっている

川崎市の通勤

目的地	昭和63年 1988年	構成比	平成10年 1998年	構成比	増減数	増減率
東京区部	175,445	39.7%	199,230	41.0%	23,785	13.6%
横浜市	44,083	10.0%	51,570	10.6%	7,487	17.0%
川崎市	194,178	44.0%	202,202	41.6%	8,024	4.1%
その他	27,716	6.3%	32,605	6.7%	4,889	17.6%
計	441,422	100.0%	485,607	100.0%	44,185	10.0%

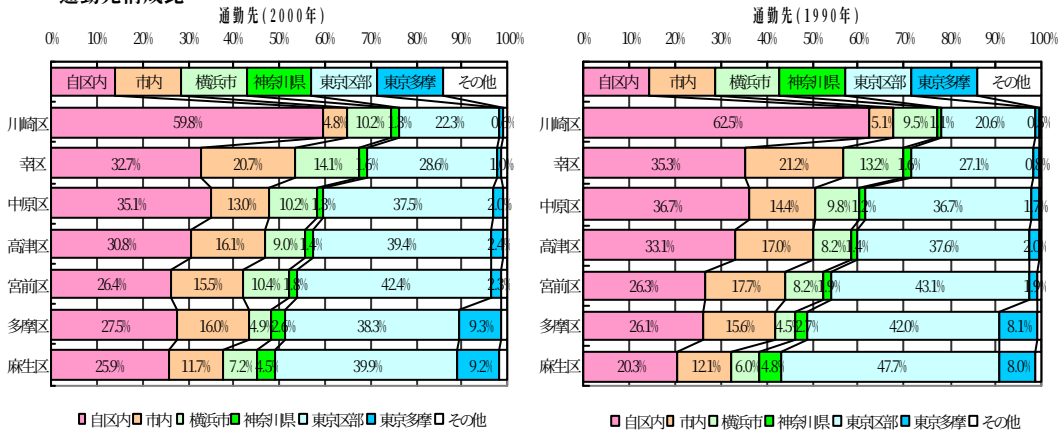
トリップ

資料：パーソントリップ調査

(国勢調査)

- ●川崎区の通勤は地元(自区内)率が過半数を超えており拠点性が高いことを示す一方で、その他の区は過半数以上が区外となっており住宅市街地の性格が強い
- ●最大の流出先は全ての区で東京区部となっており、東京区部との関係が依然として強い

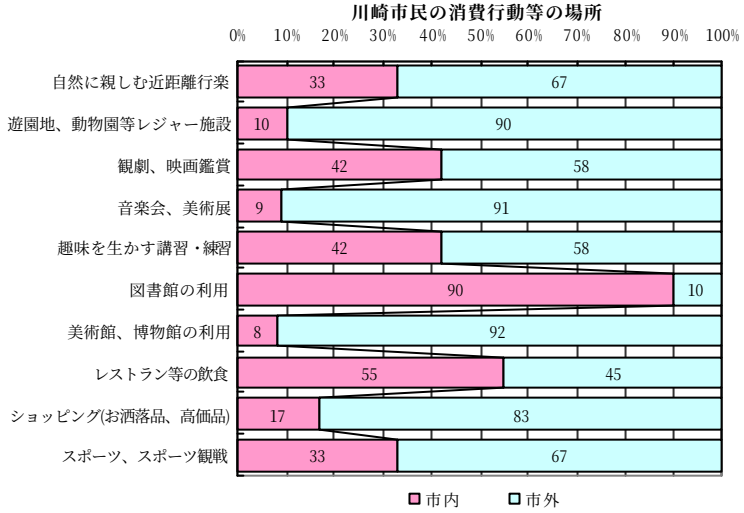
通勤先構成比



資料：国勢調査

4)余暇等の行動場所

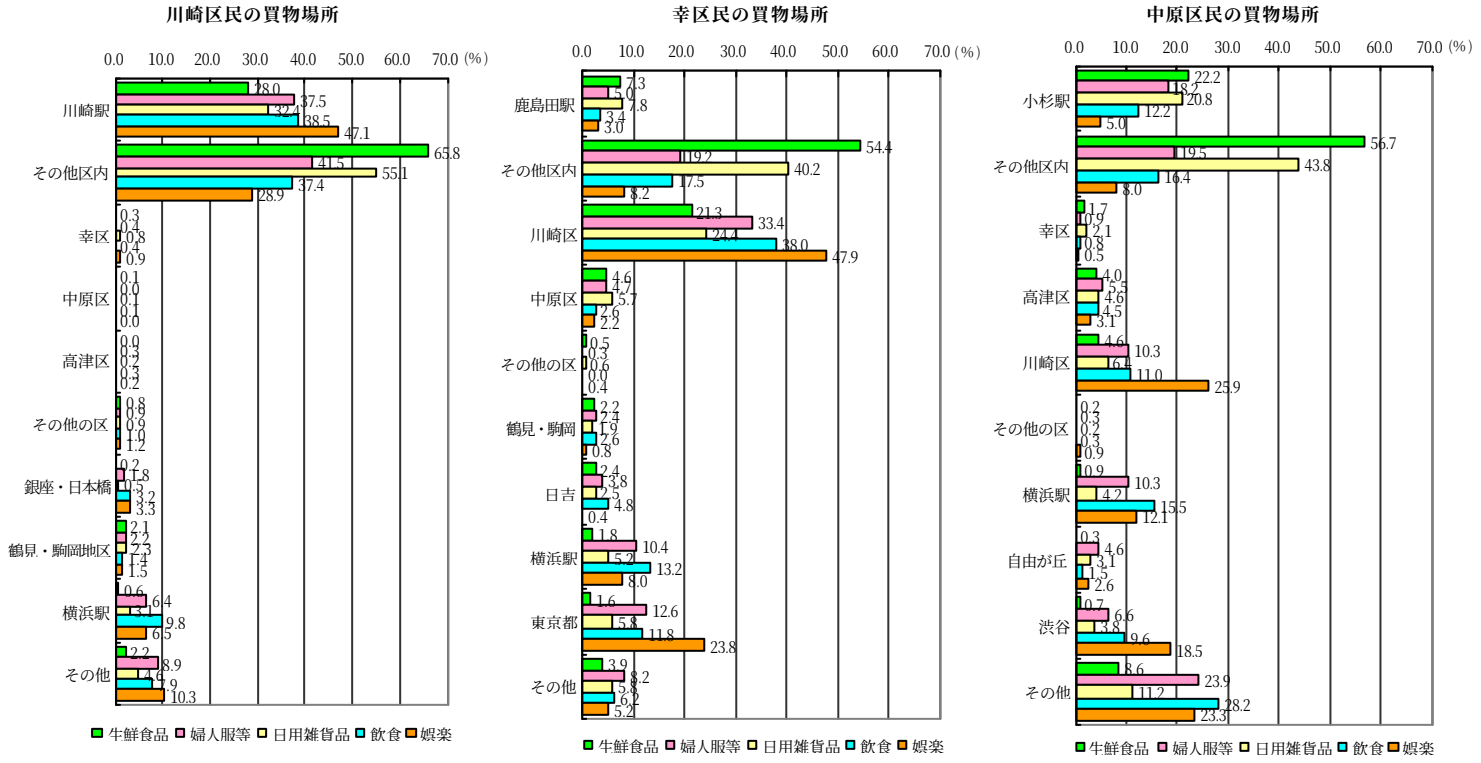
- ●全体的に市外の施設利用意向が多いが、おしゃれ品のショッピングや美術館等、音楽会等は特に市内の利用意向が低い



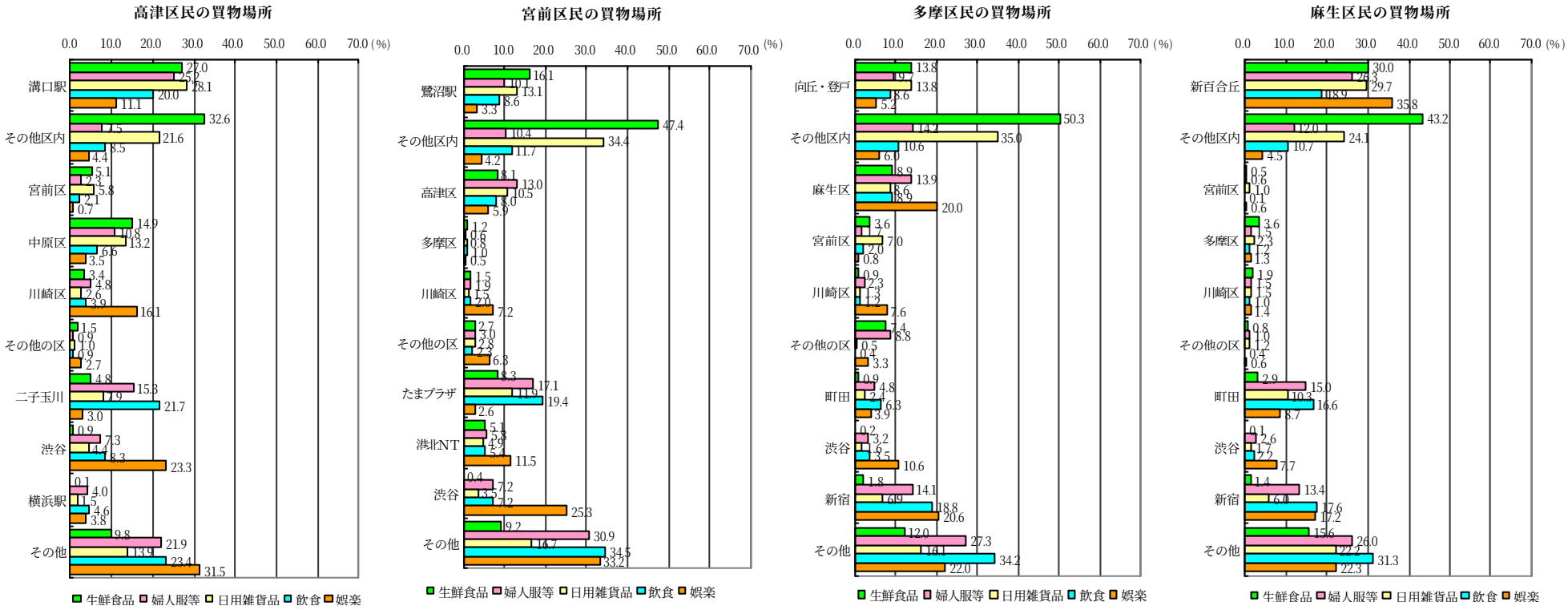
資料：市民意識実態調査2003年度

５)買物などの場所

●娯楽については、川崎区から高津区までは川崎区の割合が比較的高い。宮前・多摩区の娯楽についても川崎区の割合が生鮮食品などの買物に比べて高くなっている
●生鮮食品をはじめ買物は自区内が多いが、隣接している区も高く、生活圏が重なっている
●幸区を除く各区の買物などについては、主要駅周辺が高くなっており、区ごとに拠点が形成されているといえる。ただし、川崎・麻生以外は娯楽の割合が低く、日常的な買物の場としての性格が強いといえる。また、宮前(鷺沼)・多摩(向丘・登戸)の買物などの割合は若干低く、ほかの区に比べると拠点性が低いなど、それぞれ拠点の性格が異なっているといえる



資料：平成10年度消費購買行動調査



資料：平成10年度消費購買行動調査